

《パネルディスカッション概要》

【第3部：パネルディスカッション】

豊予海峡ルートの実現に向けて

コーディネーター：吉村 充功（日本文理大学工学部建築学科教授）

パネリスト：藤本 貴也（（公財）日本道路交通情報センター副理事長）

姫野 清高（大分商工会議所会頭）

高石 淳（愛媛県企画振興部地域振興局長）

高門 清彦（伊方町長）

土田 宏道（大分県企画振興部観光・地域局参事監）

佐藤樹一郎（大分市長）

（発言順要旨）

【吉村教授】

- 大きく2つにわけてお話を展開したい。
- 前半は、それぞれの方の所属されている自治体、または団体というところでどういう取り組みをされているか特にこの豊予海峡ルート、太平洋新国土軸構想に関してどういう取り組みをされているか。
- 後半は豊予海峡ルートの意義や効果、また実現に向けてというところで2周目の話にしたい。

【藤本副理事長】

- トンネル案では自動車は排気ガスの為のトンネルを作らないといけない。今考えると電気自動車が出てくる、自動運転も出てくる、こうなるとトンネルも相当有力になってくる。

【姫野会頭】

- 昨年対岸の松山商工会議所の産業振興委員会の方々と意見交換を行っている。それから経済5団体で毎年上京して、要望活動を続けている。
- 併せて北大経済圏構想といい、北九州から大分市内までの経済団体、それから市町村長とを含めた会があって、九州地方整備局あるいは県にもこのテーマについて要望活動している。
- PFIの活用というのが大変インパクトのある話だと思っている。
- 関西圏、あるいは大都市圏である東京等々と繋がる、これはまさに大分としては経済効果も大変大きいのではないか。

【高石局長】

- 愛媛県は大分県などの関係県あるいは、経済団体と一緒に太平洋新国土軸構想協議会あるいは豊予海峡ルート推進協議会を設立。ルートの実現に向け、国への政策提案や、海峡間の交流事業に支援している。

- 昨年度からは大分県と一緒にトップ同士の交流会、知事による交流会を実施。地域活性化、あるいは防災対策といった面で連携。
- 昨年度、愛媛西伊予、大分中部地域間促進協議会というものを立ち上げ、相互プロモーションや、フェリーを活用したイベントなどの連携にも取り組んでいる。
- 今年度新たに大分県と連携いたしまして、大分松山間の高速バスの直通化の実証試験、首都圏への情報発信を予定。航路利用者の掘起し、機能強化の促進を図りたい。

【高門町長】

- 伊方町としても大分市の後をついていきたい。一緒になってこのことを盛り上げていきたい。いまのところは互いの交流で盛り上げていく。

【土田参事監】

- 豊予海峡ルートについては、将来の大分県を支える重要なルートのひとつ。対岸県となる愛媛県と連携して活動を行っている。
- 国家的なプロジェクトなので、国に対して、地元として必要だと声を上げていかないといけない。
- 平成27年に国土交通省のほうで国土形成計画が変更された。引き続きこちらのプロジェクトについては明記をしていただいたという点では成果があった。
- 九州を発着するフェリーの8割以上が大分県から発着している中で、8航路のうち4航路が四国向けであり、たくさんの方が利用している重要な交通航路。
- 大分県と愛媛県が連携して、広域観光ルートを作る、あるいは、本県としてはフェリー事業者に支援することで、その利用を促進するといった取り組みを通じて、人とモノの交流の軸を太くする。

【佐藤市長】

- ナショナルプロジェクトということで国に話をするのが、地元の負担もあるので、愛媛をはじめ四国の皆さんと一緒にやって取り組んでいただかないと、費用の点からもなかなか難しい。
- 瀬戸内全体で盛り上がるというのが大事。
- 交流をこれからもぜひ、四国の愛媛の皆様と続けていきたいと思っている。

【吉村教授】

- 大分と四国、愛媛の交流というのがきちとなされている、それがかなり回数も重ねられて、フェリーの利用者の数、トラックの利用者が過去最高になったというのがお解りいただけた。
- もう一つが技術の進歩。昔であれば、技術的にはできても非常にコストがかかっていたものが非常に安くできるようになった。
- もしくは新技術。排ガスが出ない電気自動車だとか我々の価値観で当たり前と思っていたものが違う。そういうものを踏まえながら議論をしなければいけない。
- 次に、豊予海峡ルートの意義、課題について発言をいただきたい。

【高石局長】

○愛媛県では愛媛県新幹線導入促進期成同盟会を設立。四国各県や経済界等々と連携して、国への要望活動、県民の機運醸成、その先の夢として豊予海峡ルートの実現に向けて両県の交流に力を入れていきたい。

【土田参事監】

○本県としても非常に重要なプロジェクト。大分市と同じ方向を向いて、我々行政の取組が重要。

○本県あるいは大分市、愛媛県、伊方町、行政の立場としても継続的な取り組みを、必要性を訴えていく。

○対岸県、愛媛県との交流促進することによって実現に近づけていく。

【吉村教授】

○豊予海峡のここだけが実現しても意味がなくて、前提となっている四国新幹線が整備されているとか、東九州新幹線が整備されるということが前提であり、それにより費用対効果が1を超える。

○市長、中村先生が触れられた、環瀬戸内のネットワークが整備され交流促進がなされることに意義がある。

○交流促進ということをそれぞれの自治体がそれぞれの役割で推進し、それを盛り上げ、国に伝えていくということが課せられていること。

○次に整備効果についてのお考えを聞きたい。

【姫野会頭】

○北陸新幹線が開通した金沢では、観光客が2.74倍になった。今回の調査はそれ以上の効果になっていると思う。理由は、東九州自動車道ができてリンクすることによって、大分にはたいへんな効果をもたらしている。

○もうひとつ大きかったのは、駅の高架と併せて駅ビルが開業した。これによって、新たな街ができている。

○クルーズ&フライとあわせ、クルーズ&トレインというのが、大分にとってはインパクトがあると。

○地域経済分析システム（RESAS（リーサス））という観光データがある。これからは情報化時代であり、インフラ整備というのは遅れているから、こういう焦点をしっかりと見据えて戦略を整えることが大事。

【高門町長】

○率直に言って効果は無限大。フェリーは悪天候で欠航するため、トンネルや橋で結ばれるということになると、事業者はしっかり事業計画が立てられる。

○原子力発電所の西側に町民の約半分の5千人が住んでいる。避難計画を立てるときにその5千人をどうするのかというのが問題。それがトンネル、橋でつながるといふことになれば、数字に表せない効果が生まれ、命の橋、命のトンネルになる。

【佐藤市長】

- 観光や産業だけではなく、住み方の問題についても、ここが繋がるとなると大きな効果が生まれる。
- もう一つはリニアで大阪と東京が1時間で繋がる。
- 四国との連携は非常に重要。

【吉村教授】

- 今回の話を踏まえて、豊予海峡ルートの実現に向けてどういったことが必要か、発言をいただきたい。

【藤本副理事長】

- 二つの応援団、二つの推進力を育てて強化していくことが大事。
- 応援団は国民全体。インフラ整備の必要性について国民的コンセンサスが得られるように、いろんな形で努力しなければならない。二つ目の応援団は財政当局や整備主体になるところです。そのためには効果を大きくして、費用をできるだけ小さくする努力が必要。
- 次に推進力。まずは仲間を増やすということ。大分県、大分市だけではなく、対岸の愛媛県、九州の福岡、東九州、九州の全域、そして、瀬戸内全域、西日本となっていく雰囲気づくりが必要。
- そのためには、今は新幹線がメインということだが、必ずしも新幹線ではなく、豊予を繋ぐんだと、人と物の交流を進めるんだと、結果として新幹線でいいのか、いろんなやり方があるとしたほうがいいのかという議論を。これが一つ目の推進力。
- 二つ目の推進力。財源が必要となる。民間活力を導入して、国のお金をできるだけ少なくして取組む、地元のお金も少なくして取組むというように民間資金を活用。
- そのためには、高速道路や新幹線をつくるための新たな財源を何か考える。例えば、新幹線の料金や、高速道路の料金などに少し負担してもらって、高速道路や新幹線をつくるということに多くの人に共感をもらって進めていくということを考える。

【高門町長】

- 豊予海峡ルートは、先ほど中村先生からお話しがありましたとおり、これからの技術革新を期待して、電気自動車や自動運転バスなどを導入して、やっていっていただきたい。

【佐藤市長】

- 道路も鉄道も有力。費用的にも6800、6900億という数字。
- 非常に息の長い長期的取り組みという意見もあるが、新幹線について言うと、整備新幹線がおそらく2040年ぐらいには目途がつく。恐らく数年後には、次の整備新幹線を行うのか、これで新幹線の整備は日本では終わりにするのか必ず出てくる。
- 国の方で整備新幹線はもうおしまいという議論がある。今やるべきところは、基本計画路線を整備計画路線に上げていくということ、力をあわせてやって行くことが必要。

○順番を着けるのではなくて、東九州新幹線と四国新幹線、これを整備新幹線に上げるべしという取り組みを力をあわせてやらないとこれで全部終わりということになってしまう。

【吉村教授】

- 市長からもお話しがあったとおり、新幹線の単線整備に限った話ではない。
- 夢が夢で終わらない可能性が、今の技術革新や、交流の状況からみると可能性が出てきたというスタートラインに立った。
- 息の長い取り組みをしていかななくてはいけない一方で、次の整備にかかるのかやめてしまうのか、直近にきっと発生する問題。
- 夢を持つ一方で、議論を止めてはいけない、また、交流をまだまだ盛んにしていかななくてはいけない。
- 我々一人ひとりが取組んで行かなければならない、スクラムを組んで取組んでいかなければならないということ。